伸び支度

島崎藤村

青空文庫

十四、五になる大概の家の娘がそうであるように、袖子もその年頃になってみたら、人形のことなぞは次第に忘れたようになった。

人形に着せる着物だ襦袢だと言って大騒ぎした頃の袖子は、いくつそのために小さな着物を造り、いくつ小さな頭巾なぞを造って、それを幼い日の楽しみとしてきたか知れない。町の玩具屋から安物を買って来てすぐに首のとれたもの、顔が汚れ鼻が欠けるうちにオバケのように気味悪くなって捨ててしまったもの——袖子の古い人形にもいろいろあった。その中でも、父さんに連れられて震災前の丸善へ行った時に買って貰って来た人形は、一番長くあった。あれは独逸の方から新荷が着いたばかりだという種々な玩具と一緒に、あの丸善の二階に並べてあったもので、異国の子供の風俗ながらに愛らしく、格安で、しかも丈夫に出来ていた。茶色な髪をかぶったような男の児の人形で、それを寝かせば眼をつぶり、起こせばぱっちりと可愛い眼を見開いた。袖子があの人形に話しかけるのは、生きている子供に話しかけるのとほとんど変わりがないくらいであった。それほどに好きで、抱き、擁え、撫で、持ち歩き、毎日のように着物を着せ直しなどして、あの人形のためには小さな蒲団や小さな枕までも造った。袖子が風邪でも引いて学校を休むような日には、彼女の枕もとに足を投げ出し、いつでも笑ったような顔をしながらお伽話の相手になっていたのも、あの人形だった。

「袖子さん、お遊びなさいな。」

と言って、一頃はよく彼女のところへ遊びに通って来た近所の小娘もある。光子さんといって、幼稚園へでもあがろうという年頃の小娘のように、額のところへ髪を切りさげている児だ。袖子の方でもよくその光子さんを見に行って、暇さえあれば一緒に折り紙を畳んだり、お手玉をついたりして遊んだものだ。そういう時の二人の相手は、いつでもあの人形だった。そんなに抱愛の的であったものが、次第に袖子から忘れられたようになっていった。そればかりでなく、袖子が人形のことなぞを以前のように大騒ぎしなくなった頃には、光子さんともそう遊ばなくなった。

しかし、袖子はまだ漸く高等小学の一学年を終わるか終わらないぐらいの年頃であった。彼女とても何かなしにはいられなかった。子供の好きな袖子は、いつの間にか近所の家から別の子供を抱いて来て、自分の部屋で遊ばせるようになった。数え歳の二つにしかならない男の児であるが、あのきかない気の光子さんに比べたら、これはまた何というおとなしいものだろう。金之助さんという名前からして男の子らしく、下ぶくれのしたその顔に笑みの浮かぶ時は、小さな靨があらわれて、愛らしかった。それに、この子の好いことには、袖子の言うなりになった。どうしてあの少しもじっとしていないで、どうかすると袖子の手におえないことが多かった光子さんを遊ばせるとは大違いだ。袖子は人形を抱くように金之助さんを抱いて、どこへでも好きなところへ連れて行くことが出来た。自分の側に置いて遊ばせたければ、それも出来た。

この金之助さんは正月生まれの二つでも、まだいくらも人の言葉を知らない。蕾のようなその唇からは「うまうま」ぐらいしか泄れて来ない。母親以外の親しいものを呼ぶにも、「ちゃあちゃん」としかまだ言い得なかった。こんな幼い子供が袖子の家へ連れられて来てみると、袖子の父さんがいる、二人ある兄さん達もいる、しかし金之助さんはそういう人達までも「ちゃあちゃん」と言って呼ぶわけではなかった。やはりこの幼い子供の呼びかける言葉は親しいものに限られていた。もともと金之助さんを袖子の家へ、初めて抱いて来て見せたのは下女のお初で、お初の子煩悩ときたら、袖子に劣らなかった。

「ちゃあちゃん。」

それが茶の間へ袖子を探しに行く時の子供の声だ。

「ちゃあちゃん。」

それがまた台所で働いているお初を探す時の子供の声でもあるのだ。金之助さんは、まだよちよちしたおぼつかない足許で、茶の間と台所の間を往ったり来たりして、袖子やお初の肩につかまったり、二人の裾にまといついたりして戯れた。

三月の雪が綿のように町へ来て、一晩のうちに見事に溶けてゆく頃には、袖子の家ではもう光子さんを呼ぶ声が起こらなかった。それが「金之助さん、金之助さん」に変わった。

「袖子さん、どうしてお遊びにならないんですか。わたしをお忘れになったんですか。」

近所の家の二階の窓から、光子さんの声が聞こえていた。そのませた、小娘らしい声は、春

先の町の空気に高く響けて聞こえていた。ちょうど袖子はある高等女学校への受験の準備にいそがしい頃で、遅くなって今までの学校から帰って来た時に、その光子さんの声を聞いた。彼女は別に悪い顔もせず、ただそれを聞き流したままで家へ戻ってみると、茶の間の障子のわきにはお初が針仕事しながら金之助さんを遊ばせていた。

どうしたはずみからか、その日、袖子は金之助さんを怒らしてしまった。子供は袖子の方へ来ないで、お初の方へばかり行った。

「ちゃあちゃん。」

「はあい――金之助さん。」

お初と子供は、袖子の前で、こんな言葉をかわしていた。子供から呼びかけられるたびに、お初は「まあ、可愛い」という様子をして、同じことを何度も何度も繰り返した。

「ちゃあちゃん。」

「はあい――金之助さん。」

「ちゃあちゃん。」

「はあい――金之助さん。」

あまりお初の声が高かったので、そこへ袖子の父さんが笑顔を見せた。

「えらい騒ぎだなあ。俺は自分の部屋で聞いていたが、まるで、お前達のは掛け合いじゃないか。」

「旦那さん。」とお初は自分でもおかしいように笑って、やがて袖子と金之助さんの顔を見くらべながら、「こんなに金之助さんは私にばかりついてしまって……袖子さんと金之助さんとは、今日は喧嘩です。」

この「喧嘩」が父さんを笑わせた。

袖子は手持ち無沙汰で、お初の側を離れないでいる子供の顔を見まもった。女にもしてみたいほどの色の白い児で、優しい眉、すこし開いた唇、短いうぶ毛のままの髪、子供らしいおでこ——すべて愛らしかった。何となく袖子にむかってすねているような無邪気さは、一層その子供らしい様子を愛らしく見せた。こんないじらしさは、あの生命のない人形にはなかったものだ。

「何と言っても、金之助さんは袖ちゃんのお人形さんだね。」

と言って父さんは笑った。

そういう袖子の父さんは鰥で、中年で連れ合いに死に別れた人にあるように、男の手一つでどうにかこうにか袖子たちを大きくしてきた。この父さんは、金之助さんを人形扱いにする袖子のことを笑えなかった。なぜかなら、そういう袖子が、実は父さんの人形娘であったからで。父さんは、袖子のために人形までも自分で見立て、同じ丸善の二階にあった独逸出来の人形の中でも自分の気に入ったようなものを求めて、それを袖子にあてがった。ちょうど袖子があの人形のためにいくつかの小さな着物を造って着せたように、父さんはまた袖子

のために自分の好みによったものを選んで着せていた。

「袖子さんは可哀そうです。今のうちに紅い派手なものでも着せなかったら、いつ着せる時があるんです。」

こんなことを言って袖子を庇護うようにする婦人の客なぞがないでもなかったが、しかし父さんは聞き入れなかった。娘の風俗はなるべく清楚に。その自分の好みから父さんは割り出して、袖子の着る物でも、持ち物でも、すべて自分で見立ててやった。そして、いつまでも自分の人形娘にしておきたかった。いつまでも子供で、自分の言うなりに、自由になるもののように……

ある朝、お初は台所の流しもとに働いていた。そこへ袖子が来て立った。袖子は敷布をかかえたまま物も言わないで、蒼ざめた顔をしていた。

「袖子さん、どうしたの。」

最初のうちこそお初も不思議そうにしていたが、袖子から敷布を受け取ってみて、すぐにその意味を読んだ。お初は体格も大きく、力もある女であったから、袖子の震えるからだへしろから手をかけて、半分抱きかかえるように茶の間の方へ連れて行った。その部屋の片隅に袖子を寝かした。

「そんなに心配しないでもいいんですよ。私が好いようにしてあげるから——誰でもあることなんだから——今日は学校をお休みなさいね。」

とお初は袖子の枕もとで言った。

祖母さんもなく、母さんもなく、誰も言って聞かせるもののないような家庭で、生まれて初めて袖子の経験するようなことが、思いがけない時にやって来た。めったに学校を休んだことのない娘が、しかも受験前でいそがしがっている時であった。三月らしい春の朝日が茶の間の障子に射してくる頃には、父さんは袖子を見に来た。その様子をお初に問いたずねた。

「ええ、すこし……」

とお初は曖昧な返事ばかりした。

袖子は物も言わずに寝苦しがっていた。そこへ父さんが心配して覗きに来る度に、しまいにはお初の方でも隠しきれなかった。

「旦那さん、袖子さんのは病気ではありません。」

それを聞くと、父さんは半信半疑のままで、娘の側を離れた。日頃母さんの役まで兼ねて着物の世話から何から一切を引き受けている父さんでも、その日ばかりは全く父さんの畠にないことであった。男親の悲しさには、父さんはそれ以上のことをお初に尋ねることも出来なかった。

「もう何時だろう。」

と言って父さんが茶の間に掛かっている柱時計を見に来た頃は、その時計の針が十時を指していた。

「お昼には兄さん達も帰って来るな。」と父さんは茶の間のなかを見※して言った。「お初、お前に頼んでおくがね、みんな学校から帰って来て聞いたら、そう言っておくれ——きょうは父さんが袖ちゃんを休ませたからッて——もしかしたら、すこし頭が痛いからッて。」

父さんは袖子の兄さん達が学校から帰って来る場合を予想して、娘のためにいろいろ口実を考えた。

昼すこし前にはもう二人の兄さんが前後して威勢よく帰って来た。一人の兄さんの方は袖子の寝ているのを見ると黙っていなかった。

「オイ、どうしたんだい。」

その権幕に恐れて、袖子は泣き出したいばかりになった。そこへお初が飛んで来て、いろいろ言い訳をしたが、何も知らない兄さんは訳の分からないという顔付きで、しきりに袖子を責めた。

「頭が痛いぐらいで学校を休むなんて、そんな奴があるかい。弱虫め。」

「まあ、そんなひどいことを言って、」とお初は兄さんをなだめるようにした。「袖子さんは私が休ませたんですよ——きょうは私が休ませたんですよ。」

不思議な沈黙が続いた。父さんでさえそれを説き明かすことが出来なかった。ただただ父さんは黙って、袖子の寝ている部屋の外の廊下を往ったり来たりした。あだかも袖子の子供の日が最早終わりを告げたかのように——いつまでもそう父さんの人形娘ではいないような、あ

る待ち受けた日が、とうとう父さんの眼の前へやって来たかのように。

「お初、袖ちゃんのことはお前によく頼んだぜ。」

父さんはそれだけのことを言いにくそうに言って、また自分の部屋の方へ戻って行った。こんな悩ましい、言うに言われぬ一日を袖子は床の上に送った。夕方には多勢のちいさな子供の声にまじって例の光子さんの甲高い声も家の外に響いたが、袖子はそれを寝ながら聞いていた。庭の若草の芽も一晩のうちに伸びるような暖かい春の宵ながらに悲しい思いは、ちょうどそのままのように袖子の小さな胸をなやましくした。

翌日から袖子はお初に教えられたとおりにして、例のように学校へ出掛けようとした。その年の三月に受け損なったらまた一年待たねばならないような、大事な受験の準備が彼女を待っていた。その時、お初は自分が女になった時のことを言い出して、

「私は十七の時でしたよ。そんなに自分が遅かったものですからね。もっと早くあなたに話してあげると好かった。そのくせ私は話そう話そうと思いながら、まだ袖子さんには早かろうと思って、今まで言わずにあったんですよ……つい、自分が遅かったものですからね……学校の体操やなんかは、その間休んだ方がいいんですよ。」

こんな話を袖子にして聞かせた。

不安やら、心配やら、思い出したばかりでもきまりのわるく、顔の紅くなるような思いで、袖子は学校への道を辿った。この急激な変化——それを知ってしまえば、心配もなにもなく、

ありふれたことだというこの変化を、何の故であるのか、何の為であるのか、それを袖子は知りたかった。事実上の細かい注意を残りなくお初から教えられたにしても、こんな時に母さんでも生きていて、その膝に抱かれたら、としきりに恋しく思った。いつものように学校へ行ってみると、袖子はもう以前の自分ではなかった。ことごとに自由を失ったようで、あたりが狭かった。昨日までの遊びの友達からは遽かに遠のいて、多勢の友達が先生達と縄飛びに鞠投げに嬉戯するさまを運動場の隅にさびしく眺めつくした。

それから一週間ばかり後になって、漸く袖子はあたりまえのからだに帰ることが出来た。溢れて来るものは、すべて清い。あだかも春の雪に濡れて反って伸びる力を増す若草のように、生長ざかりの袖子は一層いきいきとした健康を恢復した。

「まあ、よかった。」

と言って、あたりを見※した時の袖子は何がなしに悲しい思いに打たれた。その悲しみは幼い日に別れを告げて行く悲しみであった。彼女は最早今までのような眼でもって、近所の子供達を見ることも出来なかった。あの光子さんなぞが黒いふさふさした髪の毛を振って、さも無邪気に、家のまわりを駆け※っているのを見ると、袖子は自分でも、もう一度何も知らずに眠ってみたいと思った。

男と女の相違が、今は明らかに袖子に見えてきた。さものんきそうな兄さん達とちがって、彼女は自分を護らねばならなかった。大人の世界のことはすっかり分かってしまったとは言え

ないまでも、すくなくもそれを覗いて見た。その心から、袖子は言いあらわしがたい驚きをもって誘われた。

袖子の母さんは、彼女が生まれると間もなく激しい産後の出血で亡くなった人だ。その母さんが亡くなる時には、人のからだに差したり引いたりする潮が三枚も四枚もの母さんの単衣を雫のようにした。それほど恐ろしい勢いで母さんから引いて行った潮が——十五年の後になって——あの母さんと生命の取りかえっこをしたような人形娘に差して来た。空にある月が満ちたり欠けたりする度に、それと呼吸を合わせるような、奇蹟でない奇蹟は、まだ袖子にはよく呑みこめなかった。それが人の言うように規則的に溢れて来ようとは、信じられもしなかった。故もない不安はまだ続いていて、絶えず彼女を脅かした。袖子は、その心配から、子供と大人の二つの世界の途中の道端に息づき震えていた。

子供の好きなお初は相変わらず近所の家から金之助さんを抱いて来た。頑是ない子供は、以前にもまさる可愛げな表情を見せて、袖子の肩にすがったり、その後を追ったりした。

「ちゃあちゃん。」

親しげに呼ぶ金之助さんの声に変わりはなかった。しかし袖子はもう以前と同じようにはこの男の児を抱けなかった。

青空文庫情報

底本：「少年少女日本文学館　第三巻　ふるさと・野菊の墓」講談社
1987（昭和62）年1月14日第1刷発行
1993（平成5）年2月25日第10刷発行
入力：もりみつじゅんじ
校正：柳沢成雄
1999年12月22日公開
2005年12月26日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

伸び支度

島崎藤村

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/